

川の水も澄んでおり、漕いだつかれのかわいたのどをうるおした事もありました。

夏、桜川の行事として「都鳥流し」という行事がありました。八月十六日にお盆の送り火の行事として行なわれたものです。七月の祇園祭が終わると、主催者である大町の青年会の若者達が都鳥流しの準備を始めます。各商店から寄附を集め、経木で鳥の型をした浮灯籠を作り八月十六日の夜どろく神のお祭と一緒に都鳥流しが行なわれます。ろうそくを灯した都鳥型の灯籠が何百となく桜川に浮かべられます。各商店では広告を入れた大型の灯籠を作ります。

桜川のゆるやかな流れに乗って下る火の祭典は、子供心にもあやしい世界に引き入れられるような不思議な美しさとして心に残ります。先祖の霊を慰め送るといふ祈りと共に町ぐるみの楽しみとして行事がなされました。祇園祭といふ都鳥流しといふ当時は行事そのものが住民の参加により行なわれた祭であり、現在の商業政策による桜まつりや、七夕まつりというような商業祭とは違つた住民の為の行事であつたわけです。町内の住民。とな

り同志の人間のつきあいが、行事を行なうことにより親密になつてゆき、生活と幸を祈る事のつながりを持つて居るのが当時の行事であつたと思います。

夏の異色な行事に川施餓鬼がありました。八月お盆の一日、舟に十人位の僧侶が乗つて念仏をとなえて川口川桜川を漕ぎ廻り処々に塔婆を立てて、川で亡くなつた人や生霊の冥福を祈つたものです。念仏の鐘、太鼓、笙、ドラの音が町の中の柳並木の川面にこだまして、五色の旗をひるがえしながら進む舟に水郷らしい情緒がありました。各家から米やお布施が舟にとどけられ、舟はゆるやかに進みます。

夏の夜は螢狩り、今の匂橋附近より上流はどこへ行つても桜川すじに螢の青白い燐光が見られました。団扇を片手に螢を追う子供の影が土手にちらりほらり、うすい曲物に蚊帳を張つた螢がごの中に数十匹の螢を入れ電灯を消して楽しんだものでした。清流にしか育たないといわれる螢も桜川にはたくさん居りました。

秋が近づくと川岸に蒲の穂を取りに行きました。芦の間蒲の赤褐色の穂を見つけ取つて来ました。母が床の